

腸管感染症の研究史

「腸管感染症の研究史」をはじめるとあって

国立感染症研究所 元所長
たけだ よし ふみ
竹田 美文
Yoshifumi TAKEDA

人類は紀元前から、幾度となく感染症の流行に襲われてきた。ときには、地域が、文明圏が、国家が、さらには人類そのものが滅びるのではないかという恐怖を覚えるほどの大流行もあった。なかでも天然痘、ペスト、スペインかぜ（インフルエンザ）、そしてコレラの世界的流行は、人類史、さらには世界の歴史の流れを大きく変えた感染症である。

私は約 50 年にわたって、腸炎ビブリオ、コレラ菌、赤痢菌、下痢原性大腸菌を研究対象とした研究者人生を送ってきた。その間、国内外の先人の研究業績から多くのことを学んだ。

現役を引退した後、先人の研究業績を整理し、次代、次次代の臨床微生物学の研究者の参考に供したいとの強い思いが募るようになった。

本シリーズでは、まずコレラの研究史を解説する。コレラは、インドのベンガル地方の風土病であったが、19 世紀初頭に世界的大流行を引き起こした。その後繰り返し世界大流行が発生しているが、その過程において、フランスのルイ・パストゥールとドイツのローベルト・コッホによって近代細菌学が成立する以前に、イタリアのフィリッポ・パチーニが病原体を観察し、イギリスのジョン・スノーが水系感染症であることを明らかにしている。これらの成果を踏まえて、20 世紀初頭にはヨーロッパおよびアメリカ合衆国において上下水道の整備や検疫の強化が進められ、大規模な流行はほとんどみられなくなった。わが国においても、昭和初期以降は大規模流行の記録はなく、近年は輸入例の報告が中心となっている。

コレラに対する治療法は確立され、有効なワクチンも開発されている。しかしながら、熱帯・亜熱帯の開発途上国においては、現在でも年間 40～50 万人の患者が報告されている。その要因を考察することは、今後の新興感染症の対策を考える上で、極めて重要な意義を有すると考えられる。

コレラの研究史に続いて、わが国の先人が原因菌を発見した赤痢および腸炎ビブリオの研究史についても解説する。